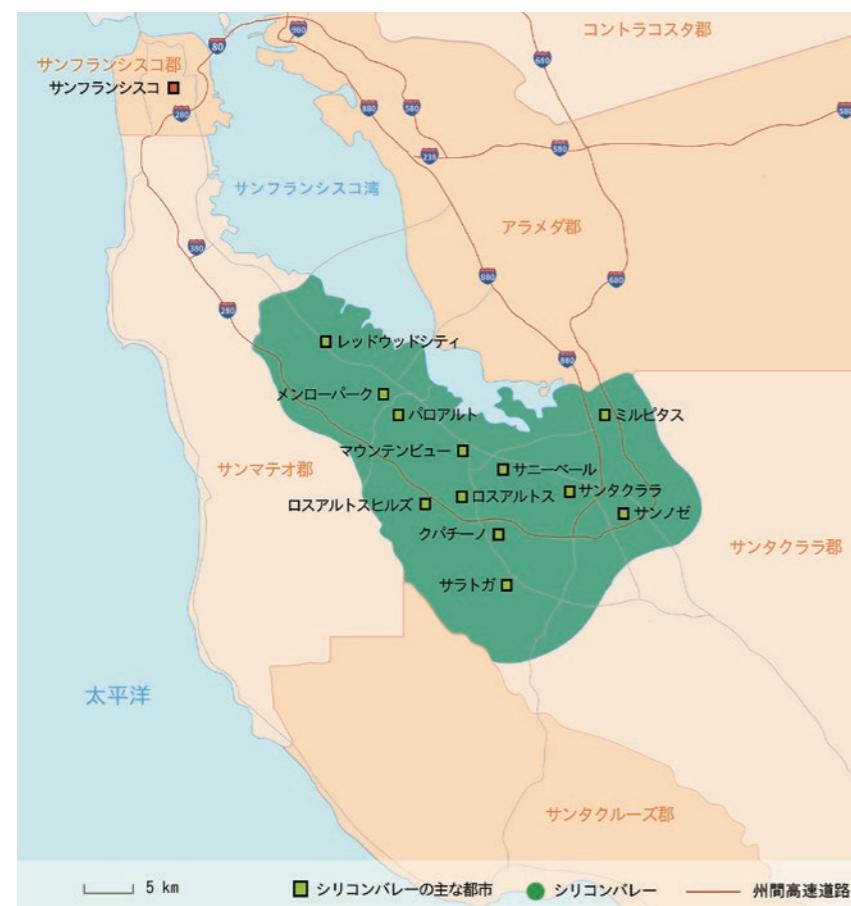




カリフォルニア州北部、サンフランシスコからサンノゼまでの湾に沿った地域をシリコンバレーと呼ぶ。本来はサンフランシスコとすぐ南隣の郊外地域は含まないが、最近では含めることがある。高速道路を車で1時間半ほどの距離の間に、ITやバイオなどの企業が点在する「テクノロジーアイオノロジ」

「投資立国」とカリフォルニア草創期
カリフォルニア州北部、サンフランシスコからサンノゼまでの湾に沿った地域をシリコンバレーと呼ぶ。本来はサンフランシスコとすぐ南隣の郊外地域は含まないが、最近では含めることがある。
本稿でシリコンバレーが現在の姿に至る歴史を振り返ることで、シリコンバレーの文化や仕組みの理解につなげていきたい。
アメリカは、もともと「投資」で



シリコンバレーの地図
(出典)Junge-Gruender.deによる地図をもとに地名を日本語化(CC BY 4.0)

テックビジネスの震源地であり続ける、アメリカのシリコンバレー。そもそも、同地はどのようにして先端技術の集積地となり、起業の聖地となつたのか。インターネット以後に何が変わり、AI時代を迎えた今、どこへ向かおうとしているのか――。

1999年以降、同地でコンサルタント・文筆家として活躍してきた海部美知氏に、シリコンバレーの歴史について寄稿してもらつた。

作られた国である。17世紀以降、欧洲の投資家がお金を出し、人を送り

込み、金銀採掘や商品作物農業といたビジネスを開発することで国が始まつた。1776年の東部13州独立以後の西に向けての開拓も、その本質は「土地開発投資」であつた。

一方、西海岸のカリフォルニアと欧洲人の関わりは、これとは異なる形で始まつた。アステカ帝国を征服し、メキシコの西海岸までたどり着いたスペイン人が南からやってきたのだ。1768年から、キリスト教伝導と先住民の征服をセットで行う

一方、西海岸のカリフォルニアと欧洲人の関わりは、これとは異なる形



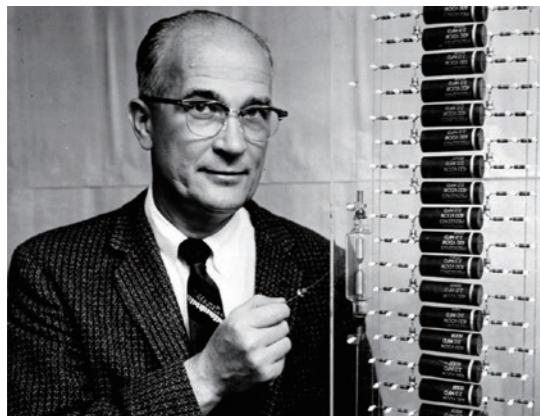
歴史で読み解く シリコンバレー

～技術と投資のエコシステムは世界をどう変えたか～

文=海部美知 (ENOTECH Consulting 代表)
かいふ みち

第二次世界大戦後、ターマンは、シリコンバレーの誕生」と呼ぶことが多い。

第二次世界大戦後ターマンは、シリコンバレーの誕生」と呼ぶことが多い。



ウィリアム・ショックレー(1910-1989)
(写真:Universal History Archive / Getty Images)

コンピューターと ベンチャーキャピタルの登場

第二次世界大戦後ターマンは、シリコンバレーの誕生」と呼ぶことが多い。

第二次世界大戦後ターマンは、シリコンバレーの誕生」と呼ぶことが多い。

第二次世界大戦後ターマンは、シリコンバレーの誕生」と呼ぶことが多い。

第二次世界大戦後ターマンは、シリコンバレーの誕生」と呼ぶことが多い。



現在のスタンフォード大学(写真:David Madison / Getty Images)

「ミッション」を展開、北に向かつて数珠繋ぎに教会と街を作つていった。

現在も、カリフォルニアの多くの都市が、「サンノゼリ聖ヨゼフ」のようなキリスト教聖人のスペイン語読みであるのはこのためだ。

1848年、米墨戦争でカリフォルニアはアメリカに編入された。同じ年に、現在のサクラメント市北東で金が発見され、人口が増加し始める。「ゴールドラッシュ」である。

翌々年の1850年、カリフォルニアは州に昇格し、奴隸州でなく自由州となることを選択した。「奴隸の保有を許せば、一部の金持ちだけが有利になる」というのが理由だ。

一攫千金指向の金儲け主義でありながら個人の自由や機会平等を重視する、現在まで生き続けるシリ

コンバレー精神である。

さて、アメリカ合衆国の領土が大陸西端まで届き、この地にもアメリカ流投資活動「鉄道ブーム」の波が押し寄せる。1869年には大陸横断鉄道が完成した。鉄道を企画した「西」グループの中心人物は、サクラメントの商人、レランド・スタンフォードであった。鉄道投資で大成功した後、カリフォルニア州知事や連邦上院議員となつて権勢をふるつた。

しかし家族には恵まれず、一人息子は若くして亡くなつた。この息子を偲び、1885年、パロアルトという街の郊外に息子の名をつけた大学を設立した。これがスタンフォード大学(正式名称:Leland Stanford Junior University)である。

軍需産業と半導体の時代

1930年代に入ると戦争の足音が聞こえるようになる。1931年

スタンフォードは全米大学ランキングを駆け上がり、卒業生が創設した企業が数多く育つ。そしてターマンは、「シリコンバレーの父」として知られるようになつた。

もうひとり「シリコンバレーの父」と呼ばれる人物がいる。シリコン、すなわち半導体産業をこの地にもたらした、ウィリアム・ショックレーである。ショックレーはパロアルトで育ち、東海岸のベル研究所(ベル研)に勤め、他の研究者とともに

ムーアが1968年にインテルを創業して独立した。こうして1950年代のシリコンバレーは「半導

学賞を受賞した。

彼は社内トラブルの末にベル研を辞めて故郷に戻り、1955年、スタンフォードの隣にショックレー半導体研究所を設立して、自力で半導体の開発・製造に乗り出す。

スタンフォード大学は軍の重要な研究パートナーとなり、インダストリアル・パークには軍需を中心にテクノロジー企業が入居した。その後トランジスタの発明でノーベル物理

トランジスタの発明でノーベル物理

コンピューターと
ベンチャーキャピタルの登場

年代は「コンピューターの時代」とな

る。マイクロソフトの創業は、その後の「ハードウェア」から「ソフトウェア」への覇権交代を象徴するものだった。この時期、シリコンバレーを資金面で支えた大きな時代の変革があった。

「ベンチャーキャピタル(VC)」の登場である。

歴史上、投資の出し手は、国王、貴族・地主、富裕な商人、成功した事業家など、「富裕な個人およびファミリー」であった。ところが1950年代に、法規制の変化をきっかけに、東部では「プライベート・エクイティ(PE)」が登場、その中で新しい小さな会社に投資するVCの活動も行うようになる。シリコンバレー企業に対するVCの投資も始まり、フェアチャイルド創設時にはニューヨークのVCが投資、これがシリコンバレーにおける最初の「VC支援創業」とされる。

1960年代には、シリコンバレーの地元でもVCが設立されはじめ、

一方、60～70年代のサンフランシスコ周辺では、カウントercアルチャーやヒッピーのムーブメントが巻き起こった。ステーク・ジョブスのようなテック坊やたちと、前衛芸術が渾然一体となっていた。この頃の、アンチ・エスタブリッシュメントでユートピア的な理想主義の風潮は、その後も長く受け継がれた。

「ネットワーク」から「インターネット」へ

1980年代に入ると、コンピューターがネットワークでつながり始めます。まだローカルに閉じたネットワークが発祥で、創業者も大多数がスタンフォード出身者である。

テムズやシスコ・システムズなどが挙げられる。いずれもスタンフォード大学内部のコンピューター・ネットワークが発祥で、創業者も大多数がスタンフォード出身者である。

しかしこの頃、シリコンバレーは比較的低調であった。80年代、この地のテック企業はアメリカ全体の経済の中で、せいぜい「地場産業」程度の存在であり、1989年に冷戦が終わって、軍需産業が大幅に規模を縮小したため、地元の経済は冷え込んだ。

資金面では、70年代から80年代初頭、アップルなどの大成功で多くのPEがこの分野に参入した。

しかし、数少ないホームランをみんなで追いかけるようになつて、リターンが低下した。

その頃、電子機器の分野で「デジタル化」の流れは始まっていたものの、まだ単発のモノの単位でとどまつていた。

1990年代に入って、学術・防衛

に用途が限られていたインターネットが、商用化された。もともとは、ソ連の核攻撃にあっても通信が止まらない企業としては、サン・マイクロシステムをつなぐ分散型ネットワークARPANETとして誕生したものだ。

90年代の半ばには、光ファイバーの容量が飛躍的に増大してコストが劇的に下がった。「ムーアの法則」と呼ばれる半導体の集積度向上で、パソコンが安くなつて普及したことも加わって、コンピューター・ネットワークが拡大していく。

1993年、イリノイ大学のマーク・アンドリーセンが最初のブラウザであるモザイクを立ち上げ、その後ネットスケープを創業して、インターネットがメールだけでなく、ウェブサイトへと広がった。なお、アンドリーセンはのちにVCを設立、このアンドリーセン・ホロヴィッツは現在最有力VCの一角となっている。

こうして、ウェブサイトを「カタ



「GAFIA」とクラウド、データ

「ログ」として使ってモノを販売するeコマースが、最初にこの新技術を

立ち上がった(「ドットコム・ブーム」)。

市場では、新興通信事業者やドットコム・ベンチャーに巨額のVC資金が集中し、短期間に高値で上場(IPO)して、起業家とVCが大儲けする事例が相次いだ。「20世紀のゴールドラッシュ」であるが、2000年3月にこのバブルははじけた。

確かに狂乱状態ではあつたが、エンジニアがたくさんこの地に集まり、通信回線やデータセンターなどが過剰に作られ、これらの蓄積が次のサイクルをもたらすことになる。

また、この狂乱により、地場産業にすぎなかつたシリコンバレーが、全国区の存在となつた。焼け野原からいくつかのベンチャーが生き残り、次のフェーズでいよいよ「インターネットとソフトウェア」が本領を発揮



Google共同創業者サーボイ・ブリン(左)とラリー・ペイジ(右)、2003年
(写真: Ullstein Bild / Getty Images)

